

教育実習で遭遇した倫理的課題

—教職実践演習での「教職の倫理」の取り組みを通して—

三森 寧子¹⁾ 鶴若 麻理¹⁾ 岩辺 京子¹⁾

Ethical Problems in Teaching Practice

—Learning about the Ethics of the Teaching Profession in Educational Practices Seminars—

Yasuko MITSUMORI¹⁾ Mari TSURUWAKA¹⁾ Kyoko IWANABE¹⁾

[Abstract]

The aim of this study is to clarify the ethical problems encountered by students in teaching practice and to examine what they learned about the ethics of the teaching profession in educational practices seminars. We analyzed a total of 32 students, who described ethical problems through questionnaires and feedback papers for the class. Students described 68 ethics situations related to respect for a child's individuality and equality. The 68 situations were classified into 2 themes : problems related to relationships (40 situations, 7 categories) and problems related to organization and management (28 situations, 3 categories). Descriptions of learning in the class were used to generate 120 codes and 7 categories, which were classified into [understanding of the characteristics of school], [understanding of the teaching profession], [the importance of ethical thinking as a professional], and [deepening of self-understanding]. In summary, learning about the ethics of the teaching profession was found to consist of (1) deepening one's understanding of school organization and education, (2) the need to cultivate ethical thinking as teachers and school health teachers, and (3) the importance of self-reflection in the teaching profession.

[Key words] Ethics, Educational practices seminar, school health teacher

[要旨]

本研究では、学生が教育実習で遭遇した倫理的課題を明らかにし、教職実践演習での「教職の倫理」の取り組みを検討することを目的とした。研究協力の同意を得られた32名のアンケート及び授業後の感想用紙を分析した。教育実習で学生が遭遇した倫理的課題は68場面であり、子どもの人格を尊重する、平等性の視点から書かれていた。類似した内容で分析したところ、[関係性に関する課題]が40場面7カテゴリー、[組織・管理に関する課題]が28場面3カテゴリーとなった。授業での学びは120コード、7カテゴリーとなり、[学校という場の理解][教員という職業への理解][専門職として求められる倫理的思考の重要性][自己理解の深化]と整理できた。以上より、「教職の倫理」の取り組みから、(1)学校という組織や教育についての理解が深まる、(2)教員・養護教諭として倫理的思考を養う必要性がある、(3)専門職として内省の重要性がある、という学びがあったと考えられた。

[キーワードズ] 倫理, 教職実践演習, 養護教諭

I. はじめに

中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」¹⁾において、教員養成制度改革の具体的方策として「教職実践演習」の新設・必修化が設定された。将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待されるとして、具体的には、1. 使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、2. 社会性や対人関係能力に関する事項、3. 幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項、4. 教科・保育内容等の指導力に関する事項について学ぶよう示されている²⁾。

一方で、本学の養護教諭養成教育においては、看護師国家試験受験資格を目的とする大学という特性からも、科目の読み替え等カリキュラム上の問題による教育現場や教育職への理解の不十分さや教育現場での実践的な学びの不足、そのために養護教諭に対する将来の展望を描きにくい等、課題が山積している。そこで、教職実践演習において、これらの課題を少しでも改善し、養護教諭を目指す学生が自らの意思や課題を再確認し、肯定的にそれらの課題を乗り越えて展望を持って進めるよう、授業内容を構成した。そして著者らは、教育実習中に「なんでこうなんだろう?」「これで本当によかったのだろうか?」と学生が遭遇した具体的な倫理的課題をもとに、「教職の倫理」について考えることを本科目の中核に位置づけた。このことは、前述の文部科学省が示した1の事項に包含されており、ねらいに合致しているものであるが、学生が教育実習で遭遇した倫理的課題を明らかにすることを通して、教職実践演習での取り組みを振り返るべく、本研究に取り組むこととした。

看護学生が臨床実習で遭遇した倫理問題について調査した鶴若³⁾によると、看護職の患者へのケアや言葉において倫理問題が生じていることを特徴とし、臨床現場への示唆を含むと指摘している。このように実習は臨床現場を具体的に知る機会であり、学生として倫理的課題に遭遇しやすいといえる。それらを学びにつなげるために、実習を振り返って専門職としてのあり方や実践の場について考えることは学生にとって意義があると考えられる。しかし、教育実習から「教職の倫理」を検討した研究はされていない。養護教諭の倫理について取り上げた研究は少なく、日本養護教諭教育学会で倫理綱領案を作成している⁴⁾ものの、合意には至っていない。また、教職実践演習に関する先行研究を概観すると、教科の指導力強化を目指した実践報告^{5) 6)}が散見され、教職の倫理について取り上げている論文は見当たらなかった。しかし、教職倫理教育については、その必要性や意義について示

されており^{7) 8) 9)}、教員養成における課題とされている。よって、本研究の意義は大きいといえる。

II. 教職実践演習の概要

教職実践演習は、4年次後期に行われる教職科目である。これまでの学びの集大成として、養護教諭の職務・実践について理解を深め、養護教諭として自覚を持って職務を遂行する資質・能力を高めることを学習目的に、実習を振り返ることを通して明らかになった自己の課題と向き合えること、実習で抱いた疑問や不安を解決するべくお互いのことを話し合えること、学生同士の学び合いを通じて、養護教諭への展望と自覚を持つこと、職業人としての自己のあり方を考察することができることを学習目標としている。

本研究のテーマでもある「教職の倫理」は、3時限分を使用している。まず倫理学が専門の専任教員による「教職の倫理」について講義を受け、その後事例検討を行うこととしている。学生が記入した、教育実習中に遭遇した様々な経験において倫理的課題ととらえた事例を再構成し、グループで各事例をより掘り下げて検討している。

なお、本研究における倫理的課題とは、教育実習中に実習生という立場で経験したことを通して、子どもや教職員、その関係性、学校のあり方などに違和感を覚えたこと、疑問を抱いたこと、判断や対応について困ったことを指す。

III. 目的

本研究では、学生が教育実習で遭遇した倫理的課題を明らかにし、教職実践演習における「教職の倫理」についての取り組みを検討することを目的とした。

IV. 方法および倫理的配慮

1. 研究協力者

2013～2015年に、聖路加国際大学（前聖路加看護大学）看護学部の養護教諭1種免許取得課程に在籍していた学部4年生および学士編入生計40名とした。

2. 研究協力者のリクルート方法

研究協力者として該当する卒業生40名に対し、研究協力依頼をメール配信にて行い、研究協力の意思を表明した卒業生に、改めて郵送にて研究協力の依頼と同意書の取り交わしを行った。

3. データ収集について

データは、4年生の在学時に記載したアンケートと感

想用紙である。アンケートは、科目「教職実践演習」の初回授業において、「教育実習を振り返って、あなたが教育実習中に経験したこと、目にしたことについて『なんでこうなんだろう？』『これで本当によかったのだろうか？』』といった違和感を覚えたことや疑問を抱いたことを少なくとも2つ書いてください」というテーマで自由記載を求めた。感想用紙は、「教職の倫理」の授業3時限を受講後に、授業後の学びの振り返りや感想をA4サイズ1枚程度の用紙に記載を求め、提出してもらった。

4. データ分析方法

授業時に実施したアンケートと感想用紙をコピーし、記載されているすべての記述を匿名化して電子データとした。

1) アンケートの内容分析

教育実習中に違和感や疑問を抱いたことについて書かれた内容から、学生が遭遇した教育現場における倫理的課題を整理、分析した。

2) 感想用紙の内容分析

記述された感想全体から、学生が授業を通して感じたこと、考えたこと、学んだことについて、文脈の意味に基づいてコードを抽出し、コードの意味内容からサブカテゴリーを生成、さらに共通の意味に基づいてカテゴリーを生成した。

5. 倫理的配慮

研究協力依頼のメールには、研究目的、研究内容、倫理的配慮について明記し、メールにて返信を求めた。研究協力の意思を表明した卒業生には、郵送にて研究協力依頼書ならびに同意確認書を送付し、返送を求めた。研究協力依頼書には、研究協力は自由意思であり、研究への協力を希望しない場合や、途中で研究への協力を辞退した場合でも、いかなる不利益も生じないこと等を明記し、同意確認書に研究協力者の署名を得ることにより協力の意思を確認した。

本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した (No16-A040)。

V. 結果

養護教諭1種免許取得課程に在籍していた40名のうち、研究協力の同意を得られた32名のデータを分析対象とした。

1. 学生が教育実習で遭遇した倫理的課題

学生が教育実習で遭遇した倫理的課題について表1に示す。アンケートに記載された68場面を類似した内容で分析したところ、関係性に関する課題と組織・管理に関

する課題に分類された。関係性における課題は40場面あり、12サブカテゴリーから7カテゴリーが生成され、さらに大きく4つに分けられた。組織・管理に関する課題は28場面あり、8サブカテゴリーから3つのカテゴリーとなり、さらに大きく2つに分けられた。以下、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを〈 〉、データを「 」内に斜字にて示す。

1) 関係性に関する課題

(1) 教員と子どもの関係

教員と子どもの関係では、〈教員優位の強引な関わり方〉〈厳しく怒るだけの指導〉〈学級経営がうまくできない〉〈学校で医療行為を行おうとする〉といった【適切とはいえない教員の指導や関わり方】と、〈教員による考え方の違いで子どもへの対応に差が出る〉といった【子どもとの平等な関係性に関わる問題】という課題が挙げられた。具体的には「教員として指導は大切だが、叱るだけ叱って終わりにするのは子どもにとっては辛いのではないか」「担任が許可した生徒のみ、別室で定期試験を受けられるという決まりは生徒にはかわいそうである」という内容であった。

(2) 養護教諭と子どもの関係

養護教諭と子どもの関係では、〈子どもや保護者に対する不適切な発言〉といった【適切とはいえない養護教諭の関わり方】と、〈子どもの心身の健康を考えて行すべき職務を遂行していない〉といった【子どもの心身の健康を考える専門職としてのあり方】という課題が挙げられた。具体的には「母親に『お母さんも娘さんがこんな風になってしまって辛いですね。お勉強も今はダメになっちゃってね』という養護教諭の言葉かけはどうか。辛くて困っている生徒本人の前で驚いた」という内容であった。

(3) 実習生と子どもの関係

実習生と子どもの関係では、〈実習生として子どもに適切な対応ができない〉〈実習生としての知識不足〉といった【実習生として適切とはいえない子どもへの対応】と、〈子どもと平等に関わるための距離のとり方がわからない〉といった【子どもとの平等な関係性に関わる問題】という、実習生として子どもとの関わり方の難しさが課題となった。具体的には「先生ではないという立場で、下の名前と呼ばれたり、秘密を打ち明けられたり、友達のように接してくる児童との距離のとり方に悩んだ」という内容であった。

(4) 養護教諭と実習生の関係

養護教諭と実習生の関係では、〈養護教諭と実習生のコミュニケーション不足〉〈養護教諭の不十分な指導〉という【実習による学習成果への良くない影響】が課題となった。具体的には「指導教員が私に何を教えたかったのか良く分からず、どうしてなのか自分で考える機会が少なかった」という内容であった。

表1 実習中に感じた倫理的課題

	カテゴリー	サブカテゴリー	代表的な場面	
関係性に関する課題	教員と子どもの関係	教員優位の強引な関わり方	熱血教師が強引な指導を行っており、良いように“先生”という立場を利用しているように見えた	
		適切とはいえない教員の指導や関わり方	厳しく怒るだけの指導	厳しく怒る教師のせいで、学校に来られなくなる生徒がいたが、怒る必要性やどの程度まで怒るのが疑問に思った 学校の生徒への指導のあり方が子どものためになっているかどうか疑問
			学級経営がうまくできない	忘れ物を沢山している男児に対してクラス全体でその子のことを支えられる仕組みを作ることができたら良かったのではないかと
		学校で医療行為を行おうとする	脱臼した生徒の関節を修復しようとした体育教員	
	子どもとの平等な関係性に関わる問題	教員による考え方の違いで子どもへの対応に差が出る	担任の先生によって生徒に対する対応や協力の程度が違っていった	
			教員による考え方の違いで生徒への対応に差が出ることで生徒の平等性の保証がない気がした	
	子どもとの関係	子どもや保護者に対する不適切な発言	養護教諭が相手の辛い状況を考えずに適切ではない言葉かけをしていた	
		子どもの心身の健康を考える専門職としてのあり方	養護教諭として身体や健康のことを子どもたちへ発信すべきではないか 毎年見直すべき学校保健安全計画が毎年同じものである	
	実習生と子どもの関係	実習生として適切とはいえない子どもへの対応	実習生として子どもに適切な対応ができない	好ましくない言葉を発して遊んでいる子どもに指導できなかった 家に帰りたがらない児童を帰宅させようとしたことが良かったのかわからない
			実習生としての知識不足	アスペルガー症候群の生徒への対応についてどうすれば良かったか悩んだ
		子どもとの平等な関係性に関わる問題	子どもと平等に関わるための距離のとり方がわからない	親しくなって距離が近くなってしまうことがあったが、どれぐらいの距離が良かったのか悩んだ
			養護教諭と実習生のコミュニケーション不足	養護教諭の会議中に帰って良いか悩んで残っていたが、帰っても良かったと言われてしまった
養護教諭と実習生の関係	学習成果への良くない影響	養護教諭の不十分な指導	何を教えたかったのか、養護教諭の指導のあり方へ戸惑いと疑問を感じた	
組織・管理に関する課題	倫理的な環境	学校が子どもにとって良い環境になっていない	教員相互の不十分な連携	基本担任は1日中クラスにいて養護教諭は保健室にすることが多い。養教と他の教師のずれの違いを何回か感じた 相手の立場を軽視する校長であったが、お互いを尊重し合っていると良いと思った
			勉強第一で子どもを締めつけている学校や教員の意識	勉強へのプレッシャーが強く、夢がない生徒が多かった。大人の考えに子どもが締めつけられている 教員の意識が勉強・進学についてとても偏っている
		子どものことを中心に考えられていない学校のシステム	子どものことが考えられていない時程	低学年の児童にとって15~20分の給食は大変そうだった
	養護教諭の人数が適正に配置されていない		養護教諭の人数は児童生徒数との割合で決められているが、子どもにとっても教員にとっても良い状況ではない	
	学校組織・管理運営のあり方	子どもの健康や安全が守られていない学校組織	学校で働く上で立場によって不利な状況が生じている	実習生として教員の机を拭いてお茶出しするよう言われたが、本当にみんながしているからやらなくてはいけないことなのか疑問だった
			子どもを守るための学校保健・学校安全の組織体制が確立されていない	養護教諭不在時にどう対応していいか戸惑っていた 生徒の出欠状況をどう把握していけばよいかその情報共有のあり方が統一されていない
			管理職の組織運営のあり方の問題	組織運営として書類や事務的手続きが多く何でも印鑑と校長の許可で、本当に必要なプロセスなのかどうか分からない
	子どもへの支援体制が整っていない	発達障害の子どもへの個別の細やかなケアは養護教諭だけで担える仕事ではない。学校で話し合われるべきである		

2) 組織・管理に関する課題

(1) 倫理的な環境

倫理的な環境における課題では、〈教員相互の不十分な連携〉や、〈勉強・進学第一で子どもを締めつけている学校や教員の意識〉といった【学校が子どもにとって良い環境になっていない】こと、〈子どものことが考えられていない時程〉〈養護教諭の人数が適正に配置されていない〉〈学校で働く上で立場によって不利な状況が生じている〉といった【子どものことを中心に考えられていない学校のシステム】が課題として挙がり、子どもにとっても教員にとっても倫理的な環境であるかといった内容であった。具体的には「校長から看護学生だからと軽視されて指導を受け、負担だった。お互いを尊重し合って働けると良いと思った」「準備が大変な低学年の子どもの給食が10~15分でごちそうさまは短いと思った」という内容であった。

(2) 学校組織・管理運営のあり方

学校組織・管理運営のあり方における課題では、【子どもの健康や安全が守られない学校組織】が挙げられた。〈子どもを守るための学校保健・学校安全の組織体制が確立されていない〉〈管理職の組織運営のあり方の問題〉〈子どもへの支援体制が整っていない〉といったサブカテゴリーが含まれており、子どもが守られている組織体制ではないことが課題として挙げられた。具体的には「養護教諭が不在で1日保健室を任された際、緊急時の対応など教員の知識の少なさを感じた。緊急時体制が整備されておらず、実習生に判断を任されて責任が重かった」という内容であった。

2. 「教職の倫理」について学んだこと

授業を通して学んだこと考えたことについて表2に示す。感想用紙にある記述内容から、120コードが抽出され、26サブカテゴリーに整理し、7カテゴリーが生成された。さらにその7カテゴリーは、学校という場の理解、教員という職業への理解、専門職として求められる倫理的思考の重要性、自己理解の深化、の4つに分類することができた。

以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを〈〉、データを「」内に斜字にて示す。

1) 学校という場の理解

学生は、学校について、〈学校は子どもや組織の問題など様々な倫理的な課題が起こりうる場である〉〈学校は責任を問われている一方で、教育のあり方がわからなくなっている〉と学び、【学校は倫理的な課題が存在する場である】と理解していた。具体的には、「学校現場では『これでいいのか』と思う事例のような問題が十分に起こりうることを改めて考えさせられた」という記述であった。

2) 教員という職業への理解

教員という仕事については、【教員はストレスが多い職業である】【教員はより高い倫理観をもって自らの言動を考えることが重要である】と教員という職業への理解をしていた。

【教員はストレスが多い職業である】では、〈教員はプレッシャーを感じざるを得ない状況でストレスがある職業である〉〈教員にはゆとりをもってストレスとうまく付き合うことが必要である〉という2つのサブカテゴリーが示された。具体的には、「教師は人格者でなければならないという見えないプレッシャーのようなものがある」「子どもたちにとってよりよいことは何かを考えるためには、教師自身にゆとりが必要ではないか」という記述であった。

また、【教員はより高い倫理観をもって自らの言動を考えることが重要である】という学びには、〈教員はハラスメントを生じやすい立場であるためより高い倫理観が求められている〉〈教員は自覚をもって誠実に行動すべきである〉〈養護教諭として倫理観をもって柔軟に対応することが大切である〉〈倫理的な問題にアンテナを高く張り、気付く能力が必要である〉という4つのサブカテゴリーが示された。具体的には、「生徒・保護者にとって教師の存在が絶対であることや高い人間像が確立されていたことを改めて理解した」「倫理的な問題に気付くことは一つの能力であり、気付く力を身につけたい」という記述であった。

3) 専門職に求められる倫理的思考の重要性

【倫理について常に考えて行動することが大切である】上で、さらに専門職として、【組織における他者との関係性のあり方が重要である】【自己と向き合い内省することが重要である】【対象を尊重する倫理的思考が重要である】と倫理的思考の重要性を学んでいた。

【倫理について常に考えて行動することが大切である】では、〈倫理は周囲の状況や相手によって変わるものである〉〈倫理は生きていくうえで基盤となる大切なことであり、常に考えなくてはならないものである〉〈倫理的な課題は正しい答えがないため、多角的に物事を考えていくことが大切である〉という3つのカテゴリーが含まれている。具体的には「倫理は答えが1つではなく、状況や相手などによって判断が変わり、当事者の考えも十人十色で難しいと感じた」「倫理的な課題には正しい答えがないため、多面的に物事を判断できるようになりたい」という記述であった。

【組織における他者との関係性のあり方が重要である】では、〈信頼できる人、相談できる人と関係性を築くことが重要である〉〈悩んだときは自分一人で抱え込まず、相談することが大切である〉〈一人一人の考え方の相違は、話し合って理解し合うことが大切である〉という3つの

表2 教職の倫理における学び

	カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
学校という場の理解	学校は倫理的な課題が存在する場である	学校は子どもや組織の問題など様々な倫理的な課題が起こりうる場である	学校では、子どもの対応という個人のものから、組織という集団内のものまで様々な場面で倫理的な問題があり得ることを学んだ 学校現場では「これでいいのか」と思う事例のような問題が十分に起こりうることを改めて考えさせられた
		学校は責任を問われている一方で、教育のあり方がわからなくなっている	今日では学校への責任が問われているが、子どもたちのコミュニケーション能力や、担任の負担を考えると、それが一概に正しいかはわからないと思った
教員という職業への理解	教員はストレスが多い職業である	教員はプレッシャーを感じざるを得ない状況でストレスがある職業である	教職という職業は、本当に人としての質、人間性に大きく左右されるものだったと思った。教育者は高いプレッシャーを感じざるを得ない状況にある
		教員はゆとりをもってストレスとうまく付き合うことが必要である	子どもたちにとって、よりよいことは何かを考えられるようにするためには、教師自身にゆとりが必要であり、意識してゆとりを持つことが大切なのではないかと思った
	教員としてより高い倫理観をもって自らの言動を考えることが重要である	教員はハラスメントを生じやすい立場であるためより高い倫理観が求められる	教育者には倫理観が重要であり、倫理について考えて行動をしていくことを意識する必要があると思った 教師に求められる人間性や倫理観という意味での“人格者”として重要なのは、道徳や倫理を守ろうとする意識を持つ一方で、それができなかった時、そのことを自覚できることなのだと学んだ
		教員は自覚をもって誠実に行動するべきである	経験を振り返り、生徒・保護者にとって教師の存在が「絶対」であるということや、教師に求められる高い人間性が確立されていたことを改めて理解した 自分の言動が児童生徒に及ぼす影響を意識し、必ずしも自分の考えが正解ではないということを忘れてはならないと感じた 誠実に責任感を持って、子どもを教育するという立場でありながら、自分も学び成長していく姿勢は、教員の倫理的思考の形成に重要なことだと感じた
		養護教諭として倫理観をもって柔軟に対応することが大切である	新人や養護教諭が一人で抱え込む状況になりやすいことを理解して、対応することが大切である
		倫理的な問題にアンテナを高く張り、気付く能力が必要である	倫理的な問題に気づくことは、ひとつの能力であり、アンテナを張り、気づく力を身につけたいと感じた
専門職として求められる倫理的思考の重要性	組織における他者との関係性のあり方が重要である	信頼できる人、相談できる人と関係性を築くことが重要である	信頼できる人や相談できる人を学校内に作って連携していくことは重要であると感じた
		悩んだときは自分一人で抱え込まず、相談することが大切である	これから現場に出て、周りの人（同僚・上司など）とも関係性を築きながら相談したり指導してもらうなど専門職や一人の社会人として成長できたら良いと思った 一人で抱え込まずに、信頼できる人に相談して、自分の考えや感情を整理していくことの大切さを知った
		一人一人の考え方の相違は、話し合っ理解し合うことが大切である	一人一人の目指すもの、考え方の相違は、話し合いなどで理解することが大切だと思った
	倫理について常に考えて行動することが大切である	倫理は周囲の状況や相手によって変わるものである	難しい倫理的問題がどこにでもあり、周囲の状況によって変わるもの。その時に自分がどう考え何を大切に思って行動すべきかということが問われていると感じた
		倫理は生きていくうえで基盤となる大切なことであり、常に考えなくてはならないものである	倫理については常に考えていかなければいけないテーマであり、教員として自分の発言や振る舞いについて、意識していきたい 倫理とは、人として、物事をどのように捉えて、どのような行動をとるか、ということの考え方の基盤になる、人が生きていく上で非常に大切なものだと改めて思った 人を対象とする以上、常に倫理はつきまとうものであり、常に考えなくてはならないのだと気付かされた

専門職として求められる倫理的思考の重要性		倫理的な課題は正しい答えがないため、多角的に物事を考えていくことが大切である	正しい答えはなかなかすぐに出せないが、大切なのは、集団や組織でもたらされる影響を常に考えることなのだったと思った
			倫理の営みとして、相手への影響や利益が公平になるように自分の一つ一つの行動を考えていくことが大切なことであると改めて考えさせられた
	自己と向き合い内省することが重要である	自分自身の倫理観と向き合うことが重要である	他の人や組織の倫理観を問う前に、必ず自分自身の倫理観を問うことが重要である
		自分の言動を振り返り、内省することが大切である	組織の中で客観的に自分の行動を振り返り、よりよい学校組織に貢献できるよう積極的に働きかけていきたい。生徒対応、教員との協働、それぞれに自分の行動を振り返り考え続けていきたい
		自分の考えとして軸をつくることが大切であり、常に倫理について意識することが重要である	倫理的思考を阻まれたとき、自分の考えにもう一度立ち返り、内省することが大切だと感じた
			自分はどうか生徒と向き合い何を教えるべきか常に考えていくことが必要になる
	対象を尊重する倫理的思考が重要である	自分の考えと異なる考え方も受け入れ、理解することが大切である	自分自身は倫理観に加え、教員同士、また学校組織全体の考え方も子どもたちの学びや成長につながる教育ができるよう、常に検討していくことが重要だとわかった
			何を一番と考えて教員として働いているのか、自身の軸をしっかりと持ち、さらに周囲に働きかけていく能力が必要だと痛感した
		子どもにとって何が大切か、真に有益となることは何か、何が子どもにとって誠実であり、公平なのか、という視点で常に考えていくことが、養護教諭としての倫理なのではないかと思った	
		子どもにとっての最善は何かという視点を持って考えることが大事である	自分がどう行動するべきかわからないことが多かったが、子どもにとって何が一番良いことなのかを常に考えることがキーポイントだと思う
		何のために行われているのか、組織として考えることも重要である	常に児童生徒にとって良いことは何か、教職員にとって学校組織にとって良いこととは何なのかという思考が重要であると考えている
	自分の身を守ることを考えることが大切である	自分の行動や考え方が倫理的であるかということだけでなく、自分の権利が守られているかといった、周囲の倫理性に気を配っていく必要性も学んだ	
自己理解の深化	教育実習における事例検討が自己の内省につながる	倫理は医療でも直面する問題であり看護職としての学びになる	学校の持つ倫理観だけでなく、医療の場でも同様のことが言えると思った
		教育実習を振り返ることで自分自身を内省する機会につながる	看護師として病院で働く中でも、倫理に反する行動を目にすることがあると思うし、自分もそうした行動をとってしまうかもしれないため、今日の学びを忘れないでいたいと強く感じた
	実際の事例検討をすることで倫理について理解が深まり、自己への気づきや考えが整理できる	教育実習が終わったあとにもう一度倫理的側面から実習を振り返り、改めて自身の言動や行動を考え直す機会を持つことが大切である	
		実習で感じた疑問やこれで良いのかと思う不安感には、今まで得てきた経験や知識から成り立っている倫理観がある	
		倫理や倫理観について日常的に考えることは少なく、人それぞれ考え方は異なるため、事例をもとに皆で意見を出し合って考えることができたのは良い機会だった	
		どの事例もすぐに答えが出ないものばかりで悩んだが、話し合うことで自分の考えが深まった	

サブカテゴリーが示された。具体的には、「一人で抱え込まずに、信頼できる人に相談して、考えや感情を整理していく大切さを知った」「周囲と話し合い理解しようとする心がSOSや話せる輪になる」という記述であった。

【自己と向き合い内省することが重要である】には、〈自分自身の倫理観と向き合うことが重要である〉〈自分の言動を振り返り、内省することが重要である〉〈自分の考えとして軸をつくることが大切であり、常に倫理について意識することが重要である〉という3つのサブカテゴリーが含まれている。具体的には、「倫理的思考を阻まれたとき、自分の考えにもう一度立ち返り、内省することが大切だと感じた」「人との関係性を考え、冷静に自分について内省ができるような教育者、看護職者になりたい」という記述であった。

【対象を尊重する倫理的思考が重要である】というカテゴリーには、〈自分の考えと異なる考え方も受け入れ、理解することが大切である〉〈子どもにとっての最善は何かという視点を持って考えることが大事である〉〈何のために行われているのか、組織として考えることも重要である〉〈自分の身を守ることを考えることが大切である〉という4つのサブカテゴリーが示された。具体的には、「何を一番に考えて教員として働いているのか、自身の軸をしっかり持ち、さらに周囲に働きかけていく能力が必要だ」「子どもにとってどうかという視点を持って考えることが大事である」という記述であった。

4) 自己理解の深化

授業を通して【教育実習における事例検討が自己の内省につながる】と自己理解につながる学びになり、〈倫理は医療でも直面する問題であり看護職としての学びになる〉〈教育実習を振り返ることで自己を内省する機会につながる〉〈実際の事例検討をすることで倫理について理解が深まり、自己への気付きや考えが整理できる〉という3つのサブカテゴリーが示された。具体的には、「もう一度倫理的側面から実習を振り返り、改めて自身の言動や行動を考え直す機会を持つことが大切である」「グループで考えていくことで、根拠を持って自分の意見を言うこと、お互いの関係性の中で自分がどのような振る舞いをしていくか、問題点や対応について冷静に考えることができた」という記述であった。

VI. 考察

結果より、教育実習で学生が遭遇した倫理的課題と授業を通じた学びについて考察する。

1. 学生が教育実習で遭遇した倫理的課題の特徴

学生は、4年生になって初めて3、4週間という長期間にわたって学校現場に身をおいて教育実習を行う。そ

れまで、児童や生徒という立場であった学生が、教育実習生として「先生」と呼ばれることや、看護学生として経験した医療現場とは違う環境に戸惑いながら、養護教諭を目指して実践の学びを深める機会となっている。そのような実習において、学生は、教員や養護教諭と子どもとの関係性だけでなく、実習生としての自分と子どもとの関係性、養護教諭との関係性において違和感を覚え、多くの倫理的課題に遭遇していた。教員の指導のあり方に対して子ども的人格の尊重や子どもにとっての益が何かという問いを抱き、教員、養護教諭、実習生の関わり方に対して子どもとの関係の平等性の問題に気付いていた。このことは、学校が子どもに対して教育を行う場であるからこそ遭遇する倫理的課題と考える。上野¹⁰⁾は、「教育」という行為は必然的に「暴力性を伴っている」と述べ、教育を行う教員や教育が行われる学校は、子どもにとって「絶対」的な存在であることを示唆している。学生は、それゆえに教員の倫理的課題に気付いていたが、学生という立場でありながら教えるという立場で実習に臨んだ中で、双方の立場にある学生だからこそその気付きであったと考える。

また、学校という場について組織・管理に関する課題に気付いたことは、学生自身に組織やシステム、環境といった全体を見る視点を持っていたことがわかる。特に対象とする子どもにとって安全や安心といった善をもたらす環境なのか、と教育現場を捉えて課題として挙げたことは、学生の感性の鋭さがうかがえる。

津田⁹⁾は、医学教育の倫理と比較し、日本の教育が「子どものニーズ」を優先してこなかったと指摘し、学校にも倫理の指針の必要性を述べている。そして教育専門職として教員自身も倫理や道徳に関する研究を行い、教員としてあるべき姿を熟慮していく必要があると指摘している。教員養成教育において、倫理について考え、実践的に学ぶプログラムが必要であろう。このように教育実習を通して教育現場の倫理的課題について考えることで、実習を振り返る必要性と学生の視点が確認でき、今後の養成教育へ重要な示唆が得られた。

2. 教職の倫理についての取り組みを通じた学生の学び

1) 学校という組織や教育についての理解が深まる

組織全体を見る視点は、医療現場で看護学生として一人の患者を受け持って実習するだけでは気付くことが難しい。言い換えれば、養護教諭が学校保健活動の中心として様々な職務を行う上で、近年の子どもたちの複雑な健康課題の解決に向けて、学校内外における組織連携のコーディネーターとして重要な役割を担っている^{11) 12)}ゆえに、学校全体をとらえる立場であることがいえよう。実習で子どもたちと向き合い、「教職の倫理」の授業を通して、改めて学校とは何か、教育とは何か、という視点

に立ち返り、学校という場の理解、教員という職業の理解につなげていたと考えられたことは、本授業の意義の一つといえる。

特に、ほとんどの養護教諭が一校に一人で配属される現状で、新人養護教諭にとって学校組織を理解することは大きな困難である¹³⁾。様々な関係性とその環境において倫理的課題に気付いていたが、その中で働くには、組織において他者との関係性を構築していく重要性が考えられていた。実践の場に出る前にこのような学びができていたことは、社会へのスムーズな移行につながると考える。

2) 教員・養護教諭として倫理的思考を養う必要性を学ぶ

教員としての倫理的課題を検討したことで、教員や養護教諭という仕事についての理解が深化していた。教員・養護教諭として、子どもにとっての最善を考えること、子どもに平等に関わることが大切であることを見出していた。また、医療現場でも同様の課題は存在することに考えをめぐらせ、今後も専門職として、倫理的に考えられるようになりたいという意味や倫理的思考を阻む考え方をしないように、倫理的な問題に気付く能力や、対象にとっての善について考え続ける倫理的思考を養う必要性を学んでいた。教員は子どもと教育的関係にあることで、倫理的思考を働かせることが不可欠であり、常に行っているという⁸⁾。つまり、教員であるならば、倫理的思考の必要性・重要性があるといえよう。

3) 専門職として内省の重要性を学ぶ

学生は遭遇した倫理的課題の振り返りと講義からの学びをよく咀嚼し、専門職としての倫理的な態度について学んでいた。特に、自己を振り返り、内省することの重要性や、自分の中で倫理観を持つこと、相手を守るには自分を守ることの大切さを述べていた。養護教諭に限らず、教員にとって「反省的实践家」は重要な概念になっていると脇本¹⁴⁾は述べている。これは、ショーン¹⁵⁾が提唱した概念であり、科学的な理論や技術では解決できない問題について、無意識に判断し行為する中で、その行為がどうであったか省察し学習していることを示すものである。自らが子どもにとって、組織に対してどうであったか、子どものためになったのか、といった内省が倫理的な態度に求められるという学びは、自分や他の学生が経験したりアルな事例という生きた教材を使い、他者と考えるという方法であったために、自らが内省を体験したからであると考えられる。他者の事例であっても身近に引き寄せて考えられたことや、様々な意見をもとに多面的に考えることが実践でき、倫理的態度として内省の重要性についてより深い学びになったと考えられる。

このように、学生から挙げられた倫理的課題を見ると、子どもにとってどうなのか、教員という立場を利用して

いるのではないかという、相対する立場の狭間で実習生として違和感を覚えていたことから、子どもであっても人格を尊重した関わりが教員には必要であるということが示されていると考える。教員の価値観を押し付けず、子どものより良い人生を見据えて、教育のあり方や教員としての関わり方を考えることが求められるといえる。本研究を通して、「教職の倫理」についての取り組みから、養護教諭の職務・実践への理解が深まったこと、養護教諭という教員としての自覚から展望が持てたこと、さらに学び合うことで自己内省、自己理解が深まったことがわかり、文部科学省が示した「教職実践演習」の4つのねらいすべてにつながる内容であったと確信している。今後も本科目の授業において「教職の倫理」について継続的かつ発展的に取り扱うが、教育実習に出る前の「学校保健」や「養護概説」といった専門科目において、学校現場に身を置いたり、事例検討をしたり、実際に「養護教諭のあり方」について考えさせられるような学習の機会が必要であると考えている。

また、本学は看護学を専門とし、その職域において指導者となる人材を育成することを教育目標に掲げている。つまり、看護の専門職だけでなく、教育者の役割も求められている。教職科目の授業ではあるが、今後、多様な場で専門職として従事する中で、この学びは大いに活用できるものとする。

本研究の課題は、この学びが卒業後どのように専門職として活かされているのか、卒業生に対する評価が必要である点である。今後は、リカレント教育の一環として継続的な倫理的思考を養う教育の機会を提供することも視野に入れ、養成教育と現任教育のあり方を模索していきたいと考えている。

VII. 結 論

学生が教育実習で遭遇した倫理的課題について明らかにし、「教職の倫理」の取り組みについて検討した結果、学生は教育現場において子どもの人格を尊重することや子どもとの平等性に問いを抱き、関係性に関する課題と、組織・管理に関する課題を上げていた。「教職の倫理」の授業では、学校という場の理解、教員という職業への理解、専門職として求められる倫理的思考の重要性、自己理解の深化という学びをしていた。以上を踏まえ、「教職の倫理」についての取り組みを通して、(1)学校という組織や教育についての理解が深まる、(2)教員・養護教諭として倫理的思考を養う必要性がある、(3)専門職として内省の重要性がある、ことを学んでいたと考える。専門職として社会に出る前に、自己を振り返り内省すること、倫理的思考を身に付けることや倫理的な課題に気付くことは重要であり、「教職の倫理」については今後も

養護教諭養成教育において取り組むべき内容であると考えられた。

引用文献

- 1) 中央教育審議会. 今後の教員養成・免許制度の在り方について. 2006. [2016.9.23].
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm
- 2) 文部科学省. 教職実践演習(仮称)について. 2011. [2016.9.23].
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm
- 3) Tsuruwaka M. Crucial ethical problem for Japanese nursing students at clinical settings. *Journal of Nursing Education and Practice*. 2015; 5(12): 17-24.
- 4) 鎌田尚子, 中村朋子, 野田智子 他. 養護教諭の倫理綱領(案)の理論的・実践的意義. 日本養護教諭教育学会. 2012; 16(1): 23-36.
- 5) 國原幸一郎. 実践的指導力習得に向けた「教職実践演習」の視座. 名古屋学院大学論集 社会科学篇. 2016; 53(1): 103-139.
- 6) 齋藤ゆか. 課題探求能力を高める「教職実践演習」のあり方: 学校教育及び生涯学習が扱う「社会」の検討から. 神奈川大学心理・教育研究論集. 2016; 39: 71-79.
- 7) 上野哲. 教職倫理教育の課題と展望. *倫理学研究*. 2009; 19: 1-12.
- 8) 木村競. 学校教育と倫理: 教員養成における倫理学の役割その5: 教員にとっての倫理的思考の必要性和児童・生徒が行う倫理的思考の意義. 茨城大学教育学部紀要. *教育科学*. 2012; 61: 429-435.
- 9) 津田昌弘. 〈特集1: 教職の専門職性の再検討〉専門職要件としての倫理綱領に関する一考察: 全米教育協会の倫理綱領の変容過程分析を中心として. 東京大学大学院教育学研究科教育行政学論叢. 2013; 33: 139-161.
- 10) 上野哲. 教育倫理学の課題—「教育=善」という自明性の再考. *倫理学年報*. 2002; 51: 177-188.
- 11) 中央教育審議会. 子どもの心身の健康を守り, 安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について. 2008. [2016.9.23].
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo5/08012506/001.pdf.
- 12) 岡田加奈子. 「ヘルス・プロモーション・スクール」「ヘルシー・スクール」のすすめ. 天笠茂監修. 管理職課題解決実践シリーズ3 子どもの心と体の健康を育む学校づくり. ぎょうせい; 2015. p.11-16.
- 13) 萩野和美, 林照子, 江原悦子他. 養護教諭の力量形成に関する研究(その1)—学校保健活動展開における困難要因に関する分析—. *大阪教育大学紀要第IV部門*. 2002; 50(2): 459-471.
- 14) 脇本健弘. 教師は経験からどのように学ぶのか. 中原淳監修. 教師の学びを科学する—データから見える若手の育成と熟達のモデル—. 北大路書房; 2015. p.47-62.
- 15) ショーン, D. A. (佐藤学, 秋田喜代美). *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*. NY: Basic Books. 専門家の知恵—反省的实践家は行為しながら考える. ゆみる出版; 2001. p.76-121.